

## 第10.1節 住民の記憶と母校の記録

(2020年11月 第33号)

1988年12月20日(昭和63年)宇佐神社で行われた尾山台在住の住民の座談会を収録しています。その住民の子供時代を思い起こしての貴重な記憶です。

## 10.1.1 住民の記憶

尾山はその昔、地名を荏原郡玉川村字尾山と言い、江戸時代に吉良領から彦根藩井伊領に替わると、大場代官の直轄する村になりました。広い奥沢村・等々力村と隣り合わせ、早くから城が築かれて開けた奥沢村に比べると、尾山は大地主もいない小じんまりした集落でした。集落の中は、東原(ひがしはら)・北原(きたはら)・南根(みなみね)・西根(にしね)の四つの区画に分かれ、戸数の少ないところでは番地もなく、例えば南根吹上ケ下等という呼び方で通用しました。

尾山は大変起伏の激しい地形で、東側には荏原郡の中でも一番の高所と言われる天慶塚(海拔45.6m)(村の人は「てんけいづか」と呼び、歴史家は「てんぎょうつか」と言う)を控え、西にはキツネ塚が有り、その中程の少し南には八幡塚(宇佐神社の東側)が有りました。これらの塚は言うまでもなく古墳で、今から約1,500年前のものと推定され、この周辺からは様々な遺跡や遺物も出土され、この地にはかなり昔から人々が住んでいたことを示しています。

尾山が台地だという事は川の流れを見ても分かります。尾山の湧き水や雨水等は、坂下の六郷用水と、一部は西を流れる谷沢川へ注ぎ込み、逆川(さかさかわ)と名付けられていました。逆川のいわれは中国の故事によるもので、中国では昔から川の流れは必ず西から東へ流れるのを自然現象と考えていました。ところがこの川は東から西へ流れているので、逆川と言いました。江戸時代中期に書かれたといわれる「名残常盤記」(なごりのときわき)の中で、吉良頼康の家臣であった橋本天王丸は主君の命令で短冊の主を探す道すがらここにたたずみ、「こなたよりして問ふ事を貴殿に問はれし逆様事、先程よりもこの川水西方かけて流れ行く、ふしぎと存じ候へばこの川水に名を付けて、逆川とは申すべし。」とつぶやいたと記されています。

尾山は村全体の広さの約60%が台地と言われ、この台地から急な坂道を下って行くと、その下に六郷用水が有り、そこから先は多摩川による河川敷が広々と続いていました。六郷用水は別名を次太夫堀(じだゆうぼり)とも呼ばれ、江戸時代の初期、小泉次太夫と言う代官が、徳川家康に進言し開削した人口の用水です。1597年(慶長二年)に測量を始め、1599年(慶長四年)から工事を開始し、15年余りの長い歳月を費やして完成しました。延々と23kmにも及ぶ用水が作られたことによって、この沿岸の田畑が潤ったことは言うまでも有りませんが、その陰には地域同士の水争いも有った様で、用水組合等が作られた時代も有りました。

昔は多摩川には堤防が無く、川原は限りなく川崎の方まで広がっていました。そこで一旦大雨になると、川の水はたちまち溢れ出て河川敷の田畑は水浸しとなり、また橋が流される等の被害に遭うことがしばしばでした。多摩川に護岸工事が始まったのは大正9年(1929年)で、それからは水害も少なくな

り、昭和8年（1933年）に15年がかりで堤防が完成した後は、戦後迄ずっと水害に遭うこともなくなりました。

六郷用水には天慶塚の東を下った坂下に天慶橋、そこから西の方へ八幡橋、北原橋、中ノ橋、浄楽橋、稲荷橋等が架けられて人々の往来に利用され、近くの家では洗い場を作って水を利用した様です。この用水の周辺一帯は孟宗竹の生い茂る竹やぶや木の茂る森で、雀達の住処でもありました。朝は一斉に雀のさえずる声で村は明け、また春先になると田んぼにはレンゲの花が咲き、夏は蛙の大合唱が聞かれ、村のあちこちを螢が飛び交う自然風物に富んでいました。



1879年（明治12年）東京府発行の地券（地券は土地権利書に相当）です。ここに記載されている武蔵国荏原郡等々力村第1492番字中丸下は、現在の尾山台駅周辺です

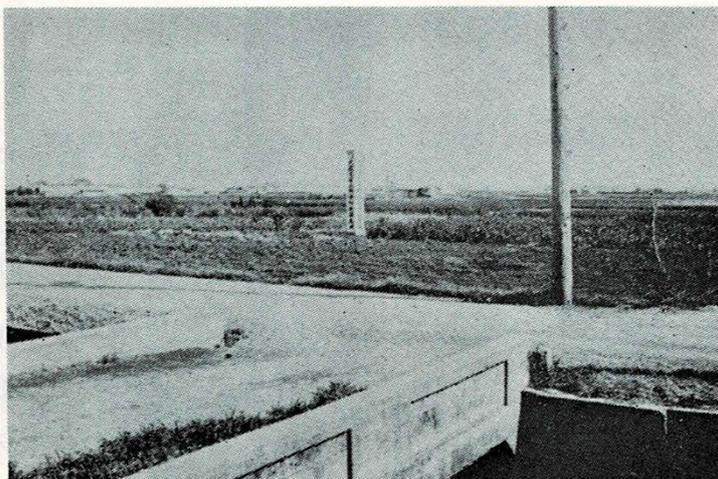
### 10.1.2 「武蔵」（武蔵工業大学同窓会誌）の記録

武蔵工業会（武蔵工業大学同窓会の名称）が母校創立50周年を記念して、同窓会誌第109号を特集号として扱っています。その中に古い写真が掲載されておりますので、紹介します。写真の原板もきれいな物でなく、さらに印刷したものの複写ですので、雰囲気を感じていただければと思っています。

#### 1) 世田谷キャンパスとなる敷地

手前に大きく映っている橋は二ヶ領用水の章でお話しした次大夫堀を渡っています。

写真はこの堀と多摩川に挟まれた場所を昭和14年に写しています。堀の北側の急な坂を登ると尾山台駅に行きます。夏の写真と思われませんが、稲作地（田圃）というよりも畑作地のような感じがします。



新築敷地

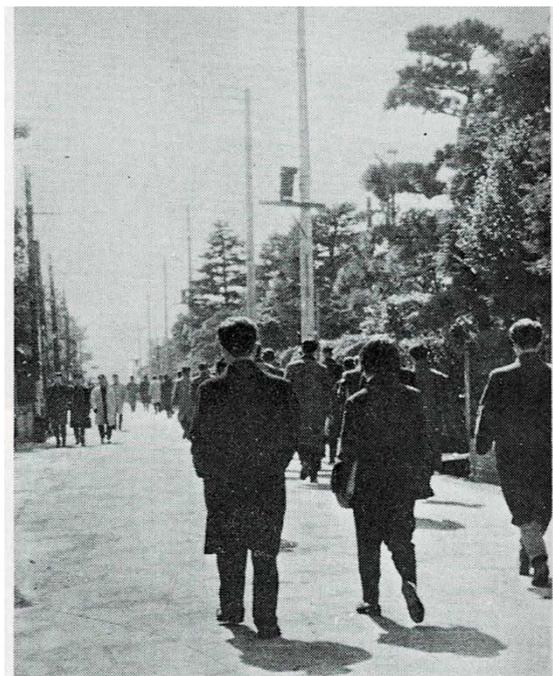
正門前の小さい橋は、現在も浄楽橋として残っている。

## 2) 通学路

尾山台駅からキャンパスに向かう学生たちです。坂道ではない様ですので、多分駅から環状八号線までの場所でしょう。

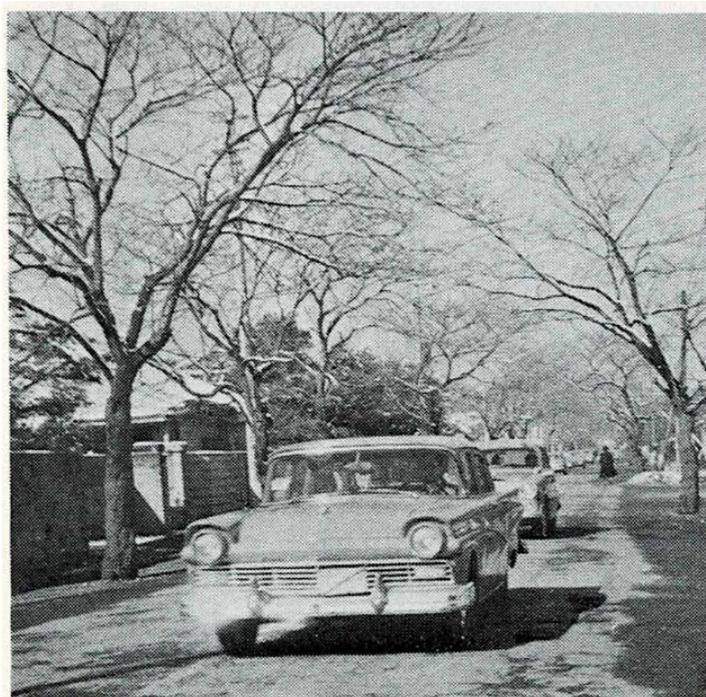
高い電信柱が林立し、トランスが載せてあります。また道沿いには大きな植木がみられます。綺麗に刈り込まれた植物や松も植えられています。昭和34年頃の写真ですが田園調布に近いこともあり、この辺も既に高級住宅地になっていたものと思われます。

道路は未舗装らしく、学生たちは右側通行を守っている様です。



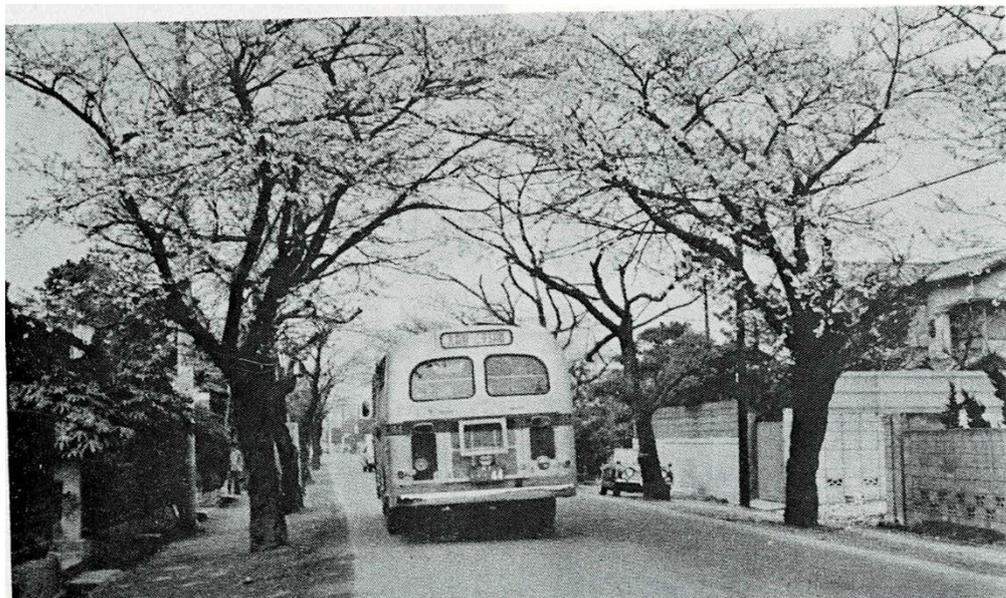
昭和34年および昭和44年当時の環状八号線を紹介します。左の写真はアメリカ車の後ろに国産車が続いています。また中央線らしきものが写っていて、2車線の道路のようです。しかし道の両側に街路樹が和えられていますが、歩道用のスペースは特に設けてはいない様です。

満開の桜並木を走るバスです。バスが大きいので1車線のように見えますが、バスの右



側、木の後ろに駐車中の乗用車が見えます。桜の木から民家の塀までの距離を考えると、とても歩行者を優先しているとは思えません。

なお影の方向から上の写真は田園調布方面に向かう車だと分かります。



## 人生を豊かに（雑学のすすめ）

ノーベル文学賞候補の作家村上春樹氏が、読者からの質問メールに答えています。

（質問）「無駄に話が長い上司」、上司の話を延々と聞かされています。話の長い人の話を短くするにはどうしたら良いのでしょうか。

（回答）話の長い人の話を短くすることは不可能です。あれは不治の病です。死ぬまで治らない。僕もよく「退屈な人って、自分に退屈しないのかな？」と思うんだけど、しないんですね、ぜったいに。気の毒だけど、あきらめてください。「退屈さには神々も旗を巻く」とたしかニーチェも言っています。神様でさえかなわないんだから、あなたに勝てるわけはありません。（村上さんのところ 村上春樹著 新潮社）

## 耳寄り情報・ジャパネットたかた創業者の、思わず納得する言葉。「伝えたつもり？」

ジャパネットたかた（長崎県佐世保市日宇町に本社を置く、日本の通信販売会社—1986年設立）の創業者である高田明氏（1948年11月3日生—大阪経済大学卒）がWBSの番組でコロナに想うでメッセージを発信していました。

経営が良い時に最悪を予測して、先手、先手の対策を練っていくことが本当に大事ということを知りました。危機が大きくなればなるほど、効率化だけでなく、無駄を覚悟で最善の対策を立てなければ、後々さらに大きな取り返しのつかないほどの代償を払うことになるかも知れません。

そして危機を乗り越えていくには、社員やステークホルダーの皆さんの協力が無ければ、社長一人では絶対乗り越えていきません。協力を得るには、納得のいく説明を、分かりやすく、より具体的に社員たちに説明をし、一致団結して問題解決に当たっていくことが必要だと思います。「結構説明したのになあ」という話を耳にします。でも、その説明を伝えたつもりで、伝わっていないということが起こっていませんか。

皆さん！ 初めの頃は何度説明しても、皆さんの反応が無かったんです。そこで、ふと気が付きました。伝えたつもりになっている自分がいて、伝わっていませんでした。それでは、「伝わった世界」を作り出すために私が一番大事にしていること。

1 番目：紹介する商品を徹底的に勉強しました。何を伝えるのかということを理解していなくて、相手に伝わるわけがないのです。

2 番目：伝える時には、伝え手の本気度と情熱が大事です。その本気度と情熱が相手に伝わった時に、一体感が生まれると思います。

そして最後に、伝えるための技術、テクニックが来るんです。伝えるのは言葉の巧さだけではありません。指もしゃべるし、手もしゃべるし、体もしゃべるし、目もしゃべるし、顔全体がしゃべるという「非言語」の力も大事な伝えるための要素だと思います。

（現社長の高田旭人（東京大学教養学部～野村証券～ジャパネットたかた）は、2012年7月、1商品を1日限りで特価販売する「チャレンジデー」を企画（第1回目の商品はエアコン）。当初、父高田明からは「在庫が残る」などの理由で反対されたが結果的に大成功し、大量販売のモデルを築いた。）

## 第10.2節 地形と暮らし

(2021年03月 第38号)

暴れ川と言われ日本有数の急流である多摩川に侵食された河岸段丘に位置するため、坂が多く住居向きではなかった様です

坂は至る所にありましたが、一番険しい坂は何といても寮の坂でした。寮の坂と言う名前は、その昔、伝乗寺の尼さんたちが住んでいた寮がこの傍に有ったことから名づけられたという事です。また坂の上の家を堂の上という言い方も残り、堂の坂とも言われています。明治35年(1902年)頃は多摩川で砂利の採集が盛んで、砂利運搬にはこの坂道を利用したと言われていました。当時、運搬の足は馬ですから、この急な坂を上ることによって馬の力(馬力)を試し、ばくろう達はその馬力によって馬の値段の取引をしたと言われていました。



寮の坂

一方、天慶塚の東側、今の雙葉学園(東京都世田谷区玉川田園調布1-20-9 九品仏駅から徒歩約10分)のある当たりの南の盆地には、室町時代には籠谷戸(ろうやど)と呼ばれ、当時は多摩川の水が此処まで来て入江となり、武器や食料が陸揚げされる等軍事拠点となっていました。(田園調布雙葉学園の出身者には天皇陛下皇后の雅子様、元郵政大臣野田聖子様、長嶋茂雄夫人の長嶋亜希子様があります。)その後も深い谷でまむし沢と呼ばれ、明治の前迄は、ここには普段人々はあまり近寄らない場所でした。馬が荷役の主だった時代では、その馬の数も多かったことでしょう。これら大事な馬を祀った馬頭観音が田んぼのあちこちに建てられていたといいますが、今はその面影も見られなくなりました。

明治5年(1872年)頃の尾山には農家が28戸しか有りませんでしたが、大正時代になると37、8戸と少しずつ増えてきました。農家の構えはわらぶき屋根が殆どで、茅葺屋根の家でもカヤと藁を混ぜて葺(ふ)いたものも多く、家の形は田の字型と言われる作りで、部屋の中央は檜の大黒柱で支えて有りました。どの農家も取入れの時の作業や子供の遊び場には事欠かない位の広い庭が有って、風よけの大木の柿、栗等の実のなる木が植えられ、境界にはお茶の木が植えて有りました。この高台から晴れた日には遠く鶴見の海がキラキラと見え、農家の人々は畑仕事の合間にその眺めを楽しんだことでしょう。

夜になると、むら一帯は暗い闇の世界に替わり、キツネ塚に住む狐やムジナ達が我が世とばかりに横行したのです。月のない夜は、鼻をつままれても分からないほどの闇で、木々や竹やぶが怪しくざわめき、遠くお台場の灯台の灯がぼつんと一つ見えるだけの気味悪さでした。また夏の夜等は降る様な星座の下で、人々は涼を求め明日の仕事について語ったこともあったのでしょう。この村には道は東西に通じる一本の道が有るだけで、そのほかの道というのは農家への行き止まりの細い道だけでした。

しかし、大正12年(1923年)9月1日の関東大地震の後、この玉川村一帯は大きく変わっていきました。この日、下町から焼け出された人々は、親戚や縁故を求めてこの尾山にも避難してきて、そのまま住み着く人々も出ています。玉川村は大正15年(1926年)には玉川全面耕地整理の為の組合が結成され、昭和2年(1927年)～4年(1929年)にかけて事業が行われ、新しい道も作られて人々の生活は便利になりました。野菜作りが盛んになる一方で、耕地が減って宅地化が進んでいくことにもなったのです。

それでも、昭和初期頃にはまだ畑作中心の農家が多く、六郷用水沿いの東側に作られた温室村からは、冬はストーブの煙が何本もたなびき、そのはるか向こうの方には富士山や大山連峰がそびえているのが高台から眺められたという事です。この温室の中では多くのカーネ이션を栽培して、まだ暖房の乏しいこの時代の子供は、温室の中に入り込んでむくむくと遊んだり、カーネ이션をそっと折って帰る等した懐かしい思い出もあるという事です。



学校給食



二子玉川の風景－昭和40年代

写真の電車は東急電鉄の大井町線です。右に見える二子玉川駅から出て来たのでしょうか。よく見ると駅付近は複線ですがこれから先は単線です。しかも路面電車のように自動車を待たせて進んでいます。

電車はこれから二子橋を渡り終点の溝口に向かいますが、橋の中央に線路があり、両側に車道がありました。

自動車のひしめく道路はこの写真の情報に進むと坂を上り渋谷方面に向かいます。この道は当時の大山街道です。現在の大山街道は写真情報の坂の上にある瀬田からバイパスで小田原方面に向かいます。この旧大山街道に沿うように東急田園都市線が渋谷に向かっています。田園都市線のもう一方の終点は小田急線の中央林間駅に接続しています。

大井町線はJR京浜東北線の大井町駅と、JR南武線の武蔵溝口駅を結ぶ線です。途中旗の台駅で池上線と、大岡山駅で目蒲線（現在は目黒線）と、また自由が丘駅で東横線と接続しています。さらに二子玉川駅から溝の口駅までは田園都市線と並走しています。なお田園都市線には一切踏切がありません。

尾山台付近は玉川村と呼ばれていました。その範囲は東側南部で大田区に接し、東側北部は途中まで目黒区との境のままで、東多摩川、奥沢が玉川村になります。また北の堺は深沢が世田谷町で等々力が玉川村になります。玉川村はその後、高級住宅地になる用賀、等々力や瀬田周辺を含む一帯になります。



村の鉄道は明治40年の玉電の二子玉川までと、大正12年の目蒲線、そして、昭和4年の大井町線で、この一帯も昭和になるまでは田圃と畑と雑木林の続く地帯でした。

玉川村は多摩川に接しているのですが、明治の終わりに神奈川県と領土の交換があり、切り離して現・神奈川県川崎市に移管されたのは、現在の等々力緑地、下野毛1-3丁目、二子新地駅東側の瀬田になります。編入された地域は、現在の上野毛1や玉川1、以前の二子玉川園があった場所、二子玉川緑地運動場の周辺です。

当時の国勢調査による人口は、1920年では約7千人、関東大震災後の1925年では約1万2千人、1930年には、約1万6千人です。

### 人生を豊かに（雑学のすすめ）【体重を減らす三つの方法—作家 村上春樹】

ノーベル文学賞候補の作家村上春樹氏が、読者からの質問メールに答えています。

（質問）私はダイエットをしています。ですが、痩せたい、自分を変えなければいけないと思いつつ食べてしまいます。

（回答）17歳でダイエットをしているんですか。大変ですね。体重を減らす方法は三つあります。三つしかありません、というべきか。だからダイエット本なんて読む必要ないんです。とてもシンプルなことです。①食べ物を減らす（適正な量にする）。②日々適度な運動をする。③恋をする。最後のやつはけっこうききますよ。がんばってくださいね。でもくれぐれも拒食症になったりしないようにね。

### 耳寄り情報

#### 【目の下のクマ・肌のくすみ・むくみの意外な原因】

綺麗になりたいと野菜ばかり食べている方は、鉄不足の危険があります。日本人女性の4人に1人が貧血・鉄不足と言われています。（2015年国民栄養調査より）。貧血の症状は肌荒れ、睡眠障害、うつ、慢性的な疲労感、長引く風邪等です。全身に酸素を運ぶ役目のヘモグロビンは、鉄と蛋白質から作られます。

鉄が不足すると酸素をうまく運べないで、集中力や思考力が低下します。脚に酸素が運ばれなければむくみ、皮膚の場合は顔色が悪く、肌がくすみます。目の下のクマがひどい、顔色が悪い、肌がくすんでいる、頭がぼんやりする、足がむくみやすい等の症状がある人は、鉄不足を疑って下さい。

鉄には体に吸収されにくい非ヘム鉄と体に吸収されやすいヘム鉄の二種類があります。動物性蛋白質の赤身の牛肉や豚、鳥のレバー、マグロやカツオを食べることで、ヘム鉄が多く摂取出来ます。また、赤身肉には鉄分やアミノ酸等の女性に不足しがちな栄養素が含まれ、脂肪を燃焼させ痩せやすくするL-カルニチンも一番多く入っているので、ダイエットにも効果的です。冷えや肌荒れの改善にも役立ちます。肉食女子が顔色も良く、生き生きしているのも納得する理由があります。70代、80代でも自分の歯で、ステーキをステーキ（素敵）に食べましょう。

## 第10.3節 食生活

(2021年08月 第43号)

村の位置や地形、の次は日々の暮らしや食生活についてお知らせします。

農家の食べ物は殆どが自給自足による大変つましい物でした。普段は主食が麦で、米を混ぜたごはん（ひきわりご飯）でした。おかずは自分の家で漬けた漬物やたくあんに味噌汁で、味噌も大豆を仕込んで、どの家でも作りました。漬物は梅干し、たくあん、味噌漬け、山東菜、白菜等と種類も多く、ぬかみそ漬けは家によっては茄子、胡瓜（きゅうり）等を四斗（18.039L x 4 = 72.156L）樽に漬ける程でした。でも時には物売りが声を張り上げながら村を訪ねると、珍しい食べ物にありつけることも有ります。

「いわしこうー、いわしこうー」と威勢の良い呼び声で大森からやってくるのは、魚屋さんでした。この声はお正月やお祭り近くなると、農家で買うということを知っていてか、必ずやって来ました。でもこの声は魚の息が落ちない様にさっさと通り過ぎていきました。朝ラッパを鳴らしながら天秤棒で担いで売りに来るのは灯具屋さんで、買う家があると、蓋に上手にお豆腐を乗せ、真鍮（しんちゅう）のピカピカした大きな包丁でトントンと手際よく切ってくれました。切り方は「やっこに」とか「おつゆに」等と、言うのに合わせて違った切り方でした。

そのほかにも、わら袋に入れた納豆売り、塩鮭や目刺し等の干し物売り、アサリ、シジミ売りも来ました。アサリをその場でむいてたり、売りに来た葉唐辛子を家で佃煮にして食べていました。その頃は六郷用水にも、ハヤ、フナ、タナゴ等の魚やシジミが取れました。

日頃は粗食な農家ですが、特別な日には手間をかけたものを作ります。「入りこわめし（赤飯）、中日ぼたもち、明け団子」、これは春と秋のお彼岸に仏様に供えるご馳走の言い伝えでした。この頃になると、家々の台所に小豆を煮る良い匂いが漂ってきました。またヨモギのとれる3、4月の頃には草団子、端午のお節句には筍（たけのこ）ご飯を作りました。どの家も祝い事には必ず赤飯を炊きましたが、平時には精進料理しか食べないのが決まりでした。このほか小麦粉を挽いて手打ちうどんを作りますが、肉は殆ど食べませんでした。

年の暮れに突く餅は、農家にとっては大切な貯蔵用の食料になっていました。それは米の餅だけでなく栗餅、キビ餅等を含めてたくさん作り、醤油や黄粉を付けて食べ、また水餅にしておいて、春先から畑仕事が忙しくなると昼ごはんやお茶うけ（おやつ）にして6月頃迄食べました。また餅を細かく切ってかき餅やあられにして、子供のお八つにもしました。お八つは季節によって、ふかし芋、衣かつぎ等もおいしい物でした。たまに威勢よく太鼓を叩きながら頭の上にお盆を載せて、飴売りがやってくると、子供たちは欲しさのあまり、みな走って行ったものです（江戸時代「八つ」は現在の2時頃でした）。

その頃尾山には、げた屋と呼ばれる万屋（よろずや）さんが一件しか有りませんでした。この万事屋さんの人は、朝御用聞きに回りながら、一日遅れの新聞を配達していました。ですから、生活に必要な物品は時には、溝の口方面迄買い出しに行くか、売りに来る物売りによって買うかしていました。農家

にとって必需品の竹箒、大小のかご類、ごみとり、すげ笠、蓑（みの）、生活上欠かせないまな板、包丁、砥石、鋸（のこぎり）、鉋（なた）、蒸籠（せいろ）、たばこ入れやキセル、鍋、釜、お玉、味噌漉し等の器具は、時には商人が売りに来ました。

また年の瀬やお盆近くになると、隣の等々力村の栄屋さんが自転車にシャツ、股引、子供用の衣類等を積んで売りに来ましたが、この店の人はそれぞれの家族の様子迄よく知っていて、その家によく合う品物を揃えていました。その他鍋、竈（かまど）等の修理をするいかけや（鋳掛屋）や、キセルの掃除をするラオ屋、卵を産まなくなった鶏をひな鳥と交換に来る業者もいました。今の環状八号線沿い当りに、安政時代から明治の終わり頃迄代々桶屋を商っていた尾山の桶屋（原田家）も有ったそうです。尾山の農家はもともと戸数が少なく耕地も小さいので、店はごく限られていましたが縁日やお祭りになると、大福餅や飴を作って売る兼業農家も出始めました。



（1958年（昭和33年）の尾山台商店街）

世田谷区は玉川地域、世田谷・北沢・砧・烏山の5地域に区分されます。この5地域は、それぞれが独自の街を形成し、雰囲気も生活環境も文化も少しずつ違います。中でも玉川地域は独立意識が強かったようです。尾山台駅を含む玉川地域が、ほかの世田谷4地域より独立意識が強かったのは、村長を先頭に熱心に玉川村の開発計画に取り組んだこととされています。

尾山台駅を開設したのは大井町線開通（1927年（昭和2年）の2年後の1929年（昭和4年）で、尾山台商栄会が発足したのは1949年（昭和24年）です。

今年（2021年）3年7月26日（月）より世田谷生活応援券（プレミアム25%付）応募受付が始まり（※抽選・完全予約販売）、一冊1万円で、1,000円券10枚+500円券5枚=12,500円分（8冊/名まで）とかなりお得です。

尾山台付近にはV6の井ノ原快彦と女優瀬戸朝香（2007年に結婚）夫妻が住んでいるそうです。



（1958年（昭和33年）の自由が丘駅

旧武蔵工業大学は、1955（昭和30）年より「東急グループ」の「五島育英会」の経営となった大学で、2009（平成21）年に「東京都市大学」に改称しました。前身の「武蔵高等工科学学校」は1939（昭和14）年に現在地（現・世田谷区玉堤）に移転しています。

1927（昭和2）年、東京横浜電鉄（現・東急東横線）が「丸子多摩川駅」（現「多摩川駅」）から「渋

谷駅」まで延伸され、現在の「自由が丘駅」から北寄りに「九品仏駅」が開設されました。1929（昭和4）年の目黒蒲田電鉄（現・東急）二子玉川線（のちの大井町線）の開通で、「九品仏」の寺院から近い場所に現「九品仏駅」が開設されることになったので、元の「九品仏駅」は改称が必要となり、新駅名は「衾（ふすま）駅」と内定しました。しかし、石井漠（舞踊家）（1886年生～1962年没）をはじめとする文化人の住民の強い要望を受け、「自由ヶ丘駅」へ改称になりました。

### 人生を豊かに（雑学のすすめ）

#### 【「等々力」という地名の由来】

深沢の都立園芸高校は、「兎々呂城」（とどろじょう）の城趾です。戦国時代の武将でこの地を領有した北条（ほうじょう）氏康（うじやす）（1513–1571）の家来、南条（なんじょう）右京亮（うきょうのすけ）の居城「兎々呂（とどろ）城（じょう）」がありました。その後「兎々呂城（とどろき）」そして時代を経て、等々力という地名になったというのが有力な説です。

都立園芸高校は日時を決めて校内を見学開放しています。「史跡 兎々呂城趾」の石碑をぜひご覧下さい。（情報提供：豊田正雄氏）

### 耳寄り情報

#### 【夏目漱石と歌枕】

「歌枕」とは不思議な語です。「枕草子」の古典にも「枕」がつかますし、「枕詞」等の修辞法もあります。この「枕」について、折口信夫（おりくちしのぶ）は「神霊がよりつき、国魂が寓する」場所と言っています。日本人は信仰の上では枕を「魂、殊に生魂（いきみたま）の集中保持せらるゝ処（ところ）」と信じていたと述べています。

能の物語としての場も、よく歌枕が使われます。能の主人公であるシテは幽霊や神様であることが多いのですが、彼らがこの世に再び現れるのは、残して行ってしまった「思い」に引かれてです。彼らの「思い」は魂の寓する「枕（真蔵—まくら）」である「歌枕」の地に残り、そこで生魂となります。

昔の旅人は、だから歌枕の地を通過するとき必ず歌などを詠みました。それは万葉の昔から江戸時代まで続きました。奈良、平安の文学はいうに及ばず、江戸時代の「奥の細道」をはじめとする芭蕉のさまざまな紀行文もそうですし、また彼が愛好していた「竹斎（ちくさい）」の物語なども歌枕を巡った「伊勢物語」のパロディのようです。また近代でも夏目漱石の紀行文などにもその名残を見ることができます。（能に学ぶ「和」の呼吸法（安田登一祥伝社）より）

## 第10.4節 年中行事

(2021年11月 第46号)

農家の人々は忙しい中でもその時々行事を大切に守り、そうした祈り事には普段とは異なるご馳走を頂くのが楽しみでした。こうした行事は、村人達の大事な相談事や助け合いの機会でもありました。

年越しとお正月の行事は、昔からの大きな行事です。秋の収穫も済んで、明けには麦が少し伸び始めました。この時期は麦の値付けや分鬮（ぶんけつ＝稲、麦等の茎が根元で枝分かれする事。）を良くする為に、何回か麦踏をします。また夏野菜を取り込んだ後の畑には、大根が育っています。年越しの行事の初めは、12月8日、八日堂といって鬼が来るので、竿に笹（ざる）、籠等をさして門口に立てておまじないをし、その後は小豆粥を食べる習わしでした。そしてお正月用品を市場に出荷した後は、市内に親戚のある家ではお正月の物を手車に積んでお歳暮として配って回りました。その後、それぞれの農家では新しい藁（わら）でしめ縄を作り、すす払い（大掃除）をし、年越そばを作ります。女性は正月用の煮物作りも大変でした。とりわけ大変だったのは餅つきです。餅つきをする時には、御団子を棒に刺して門口に置き、「ミカワリバアサン」に供えました。これはその昔六郷用水（丸子川）で子供を亡くした母親が、我が子を探してこの辺を歩き回るので、お腹を空かしたら食べる様に供えるのです。

餅つきは今より大家族の上に、本家でまとめてつくことが多く、分家や近所の分まで含めると、7、8俵はついたと言いますから、なみ大抵のことでは有りません。それぞれの家から人手を借り、まずもち米が蒸かし上がると臼にあけて杵でつき、一回毎に手返しをしながらお餅になる迄繰り返すのです。この時は米の餅だけでなく、粟、吉備やもち餅を、安倍川餅やあんころ餅にして近所に配る等、忙しく立ち回らなくてはなりません。

さて年の瀬も押し詰まって30日になると、家々では神棚にしめ縄を張ってお神酒（みき）とお灯明をあげ、元旦には家の主人が鏡餅を供えて家族の一年の安全を祈って、新しい年が始まります。また、仏壇には花やお供え、お正月のご馳走をあげてお念仏を唱えました。この後から一家揃って新年のお祝いの膳が始まります。初詣に行く習慣は有りませんでした。子供たちにとっては、1月15日の「せいのかみ」が楽しみなお正月行事でした。

**閑話休題** 大晦日の歴史はかなり古く、平安時代まで遡ります。大晦日は正月に迎え入れる歳神様をまつための準備の日で、歳神様は稲の豊作をもたらすとされている神様のことです。農作物が豊かに実り、食べるものに不自由することなく暮らせるようにと、昔から大切に扱われてきた神様です。また、歳神様は各家庭にやってくることから、家を守ってくれる祖先の霊とも考えられていたそうです。昔は1日が夜から始まって朝に続くこととされ、大晦日の日暮れからすでに新年の始まりでした。そのため、大晦日の夜は歳神様を待ち、一晩中寝ずに起きておくという習わしがありました。

## 人生を豊かに（雑学のすすめ）

## 【村上春樹の生き方】

ノーベル文学賞候補の作家村上春樹氏が、読者からの質問メールに答えています。「村上さんの生き

方の原点は？」 村上さんの揺るぎない、ある意味頑なな生き方は、少年あるいは青年時代に、これといった大きな何かに影響を受けたからだというのはありますか。

(回答) どうしてこういう性格になったのか、僕にもよくわかりません。両親ともまったく似ていないし、まわりの誰とも似ていません。若いうちに結婚、自立して商売を始め、それから小説家に。そうするうちにだんだん自分の世界、というか生き方が固まってきたということだと思います。

各段階で身銭を切っているいろんなことを学んで、それが身についてきたということだと思います。身銭を切るって大事ですね。他人のお金を使っては何も身に付きません。本当に大事なことは多くの場合、痛みと引き換えにしか手に入りません。(村上さんのところ(村上春樹著 新潮社)より)

### 耳寄り情報【カミソリ大隈重信と橋本徹馬】

大正年間から昭和にかけて活躍した橋本徹馬という政治評論家がありました。辛辣を持って知られた人ですが、この人がある新聞で、大隈重信を徹底的に批判しました。まだ若くて成年客気(かっき)の頃なので、大得意になり、どれだけ大隈が意気消沈しているか見てやろうと思い、早稲田を訪ねました。そうすると、大隈が応接間に現れて、石原莞爾と笑いながら、「おお、げんきにやっちょるのう」といって、機嫌よくソファに腰かけ、何のわだかまりもなく話をしたそうです。橋本が完敗したわけです。

大隈という人は、もともとこういう人では有りませんでした。伶俐で剃刀みたいな人でした。馬鹿な事、くだらないことをいう奴と見てとると、全く話をしません。会おうともしないのです。どうでもいい人間と合うのは時間の無駄だと言って、選び抜いた少数の人間としか会わない、触れれば切れる様な人でした。

この様な性分ですから、周りに人は集まりません。雑多な人が寄ってくるのではないと、政治家はつとまりません。それを見ていて、かつて大隈家の居候だった実業家の伍代友厚が大隈に諫言し、更に手紙を送って忠告しました。

要点は、①愚説愚論を聞くべし。一を聞いて十を知ってしまうのが、閣下の短所である。②地位が下の人間が、閣下と近い意見を述べたらすぐに採用すべし。他人の論を褒め、採用しないと徳は広がらない。③怒るべからず、怒気怒声は禁物。④事務の処断は、急ぐべからず。即決せずにぎりぎりまで待つべし。⑤閣下が人を嫌うと、向こうも閣下を嫌うようになる。進んで、嫌いな人との交際を求むるべし。

さすがに元居候だけあって、よく見えています。大隈が偉いのは、伍代の建言を受け入れたことです。それだけで、やはり器量人だという気がします。どんな愚論愚説も終わりまで聞き、ちょっといいと思った提案は残らず採用し、決して怒らず、怒鳴らず、処理を急がず、大嫌いな相手に交際を求める、という流儀に変えました。180度の転換ですね。50歳を超えて、これが出来たのですから、やはり大人物です。誰でも受け入れるので、一時、大隈家の居候は100人近くになったと言いますが、これ位開けっぴろげになれば、誰でも厚意を抱かずにはいられません。

大隈が身をもって示してくれたのは、器は修行によって大きくなる、人は何歳になっても変わることが出来るということだと思います。なかなか出来ることではありませんが、決意すれば明日からでも、変わる事が出来る、その事を大隈重信は示してくれます。(人間の器量(福田和也より))